

I 部 公開シンポジウム

—地域と向き合う大学を考える—

- (1) 日時：11月23日(金)、午後1：30～3：30
- (2) 場所：教育学部2階、教育工学実験室（地図参照）
- (3) 主催：長崎大学生涯学習教育研究センター
- (4) 対象：学生、一般、学内教官
- (5) パネラー（五十音順）

石松 隆和教授	司会（前半）：糸山景大教授
片岡千賀之教授	（生涯学習教育研究センター長）
上蘭恒太郎教授	同（後半）：新田照夫助教授
姫野 順一教授	（同センター専任助教授）
門司 和彦教授	



【写真：H13年公開シンポジウム】

1 節 はじめに：大学が地域にどうかかわりを果たしていけるのか

今日の司会をつとめます糸山景大でございます。現在教育学部に所属し、生涯学習教育研究センター長を併任しています。それから後半の司会をしていただきます、同じく生涯学習教育研究センター専任助教授の新田照夫でございます。本日は長崎大学生涯学習教育研究センターが主催致します「公開シンポジウム—地域と向き合う大学を考える—」に多数参加いただきましてありがとうございます。現在大学が抱えております課題の一つに「大学の地域貢献」というものがあるのですが、大学が地域にどうかかわりを果たしていけるのか、という点について皆で考えてみようという企画です。今日のこの公開シンポジウムで何か結論じみたことをひっぱりだそうというのではなくて、いろんな角度からいろんな意見を提示していただいて、それを皆で考えていければと思っています。まず前半ではパネリストの先生方のご意見をお伺いして、それを糸口にして話を膨らませていければと考えています。

そこで一番最初に今日ご出席のパネリストの先生方をご紹介しますと思います。まず工学部機械工学科の石松隆和先生です。石松先生はロボット工学とかメカトロニクスの研究をなさっておられるわけですが、その中でパーソナル・ロボットを福祉分野にどのような利用ができるか、というところで地域とのかかわりを持っておられるという



【写真：H13年公開シンポジウム】

うことです。次は水産学部水産学科の海洋生産システム学講座の片岡千賀之先生です。片岡先生は今、資源管理や地域の漁業問題について力を入れて研究をなさっておられます。真ん中にいらっしゃる先生は教育学部教育学講座、上菌恒太郎先生です。上菌先生は、教育学における価値に関する研究をなさっておられ、またいろんな形で地域にかかわっておられます。次に向こうから二人目の先生は環境科学部の姫野順一先生です。姫野先生は本来は環境科学部の社会

経済学および経済思想史の先生で、現在は古写真の研究もなさっており、テレビ等でもたびたび出ておられるので皆さんもご存知かと思います。一番向かって右端が医学部保健学科の門司和彦先生です。門司先生とは今日はじめてお会いしました。今日はどのようなお話がお聞きできるか、私も楽しみにしています。

ではまずパネリストの先生お一人おひとりに「地域に向き合った大学ということでお話をいただきたい」と思います。なお、お話の最後にお話のキーワードを一つか二つお話いただきたいといます。

2 節 パネラーからの提案

1. 権利としての大学開放：(石松隆和教授：工学部、キーワード：「高齢者生活支援」)

(1) 大学がどのような地域貢献をすべきか

紹介いただきました工学部の石松です。ロボットとか画像処理とかをやっていますが、今は福祉工学といますか福祉のことをやっています。そこで今日ここにお呼びいただきまして最初に私自身が地域貢献についてどのような考えを持っているか、ということについてお話をさせていただきます。そして具体的に何をやっているかということをお話させていただきます。



【写真：H13年公開シンポジウム】

まず、大学がどのような地域貢献をすべきかという考えについて少しお話しさせていただきます。みなさん長崎大学の学生が殆どだと思いますが、授業料を大学に払っていますよね。長崎大学は税金と皆さんの授業料で動いています。長崎大学は税金を受取っているということで、当然やらないといけなことが出てきていると思っています。簡単な事例をあげますと、私は教育学部のプールを借りて泳いでいます。ある時うちの学生を連れていこうとさそったのですが、学生がどのような反応をしたかということ「え！プールで泳いでいいんです

か？」と言うんです。「なぜそういうことを言うの」と聞くと「だってあれ教育学部でしょう？」と言うんです。そこで私は「そうじゃないんだよ、君たち授業料払っているんじゃないか？だから大学のものは何でも使っているはずじゃないか」と話すのですが、なかなかわかってくれないんです。非常に大事なことは、皆さん学生だから授業料払っている以上は権利があるということです、例えば、この大学の中には体育館、図書館などがあります。皆さんは本来これらを使用する権利を持っているべきなのですが、「夜は職員の都合で申し訳ありませんが使えませんよ、管理上使えないのですよ」ということなのです。学生は本来自由に使える権利があるのですがやむを得ず、ある部分で制限を受けている状況にあるのです。

同じように、大学だって地域の方々から税金を払っていただいて運営している以上、地域の方々に対して大学を相当量自由に使える権利を納税者 (tax payer) として持っているわけです。図書館・体育館・運動場だって、ただし管理上どうしても、またほかの方の利用もあるので止むを得ずお待ちいただくこともあるのです。ヨーロッパなどでは小学校・中学校・高校などいずれも夜の10時頃まで自由に使えるようになっています。施設ばかりではありません。大学の部屋や私たち教官なども税金で雇われている以上、地域の方々には利用する権利があるのです。そのことを考えると大学はどうあるべきかが分かってくると思います。じつはこういうことは大学の先生方や学生そして地域の方々あまりよく分かっていないように思います。ある時、大学の講義の中で、長崎大学は地域に貢献すべきであることを話したことがあります。その一つの最悪の例として、長崎大学はコンクリートで囲まれている、これを全部とっばらおうではないか、生協なども地域の人々が自由に食事ができるようにしようということが話題になったことがあります。シーボルト大学は壁がなく、地域の人々が自由に入れるようになっています。長崎大学ではそういう方針はまだなく、塀が取っ払われて自由に出入りできるようになればよいなと思います。学生にこのことについて意見を聞いたことがあるのですが、学生はかなり多くの方が「せっかく長崎大学に合格して入れたのにここに地元の人がでぞろぞろ歩いているのは嫌だ、ここは自分達だけの場所であるという意識がもてなくなるのでオープンにしてもらっては困る」と言うのです、こういう片寄った意識を学生

の一部が持っているし、これは地域の人も持っているのではないか。もっと地域の人も大学開放を要求していいのではないか。大学開放について大学の施設課の方と話したことがあるのですが、大学としても塀をとっばろうという計画を現在持っているようです。そして実際にやろうかとしているのです。これも大学が地域に貢献しようとする動きですし、地域もそうした意識を持って下さい、ということですが、ここで一番欠けていることは「そうした権利がある」という意識です。学生たちも先生方にも欠けているのではないか。そしてこうした大学開放の催しをすることによって「大学開放があたりまえ」というふうになるといいと思います。

(2) 具体的な活動：「長崎斜面研究会」「高齢者生活支援研究会」

私はそういった基本的な考えで大学の中で活動をしています。そこで具体的な活動として二つのことをしています。その一つは「長崎斜面研究会」です。会員数が150名程で医療関係者が多く、長崎では斜面地に暮らす高齢者の生活支援をやるということで組織をつくり、私はそこの事務局を大学の中で行なっています。いろんなイベントや障害者のため支援活動や行政との橋渡しなどの活動を5年ぐらいやっています。もう一つの活動として、私はエンジニアとして物づくりを通して地域に貢献できないかということで、長崎市内では三菱重工を退職された方々が大勢いらっしゃって、そういう方々が自分の技術を生かしたいと考えている方40名ばかりで大学に集まってもらって「高齢者生活支援研究会」というものをやっています。障害でお困りの方でこういう機械が欲しいなあと思っている方のお宅へ訪問して、ものづくりをやっています。また大学の中の実験室などをつかってものづくりをしたり、長崎のハートセンターで福祉機器相談会などを設けさせていただいています。さらに、実際に非常に困っているいろんな方々のところ、例えば五島、滑石、平和町などを訪れてものを作ってあげる、しかしこういう方々は金銭的に困っている方が多いので、現状では行政の支援を得たりしてやっています。早くNPOなどに移管したいと考えています。どちらかといえばこうした二つの活動は福祉に関する活動ですが、大学の方以外の方々の支援をいただきながらやっています。

司会（糸山）：それでは片岡先生にお話しをいただきたいと思います。

2. 実学としての水産学：(片岡千賀之教授：水産学部、キーワード：「実学」)

(1) 大学の現状：多様化する水産学部の教育・研究

水産学部の片岡でございます。キーワードは「実学」でございます。水産学部にありますから水産学の話はしますが、もとより個人的な意見ですし、見方が片寄っているかも知れません。水産学部は学部が始まって以来、実学として水産業と結び付く形で始まりました。漁業・養殖・水産製造という水産業の中身と合致する方向で学科編成



【写真：H13年公開シンポジウム】

をしていて、教育目標も水産教育者、技術者養成ということでございます。したがって、学生は大学で水産関係のことを学び、卒業後は実業界に入って水産技術の開発普及ということで水産業を支えてまいりました。ところが水産学をみても専門分化が進んだ結果、水産学がカバーする範囲が非常に広がってきています。たとえばある出版社から水産学シリーズという本が出てまいりますと、大変膨大な量になりまして、これを最初から最後まで読む人は多分いないと思います。「いない」ということはどういうことかといいますと「水産とはなにか」という哲学の部分を書ける人がいなくなってきたということでもあります。細かく分かれてきた自分の専門については知っているけれども全体との関係については良く分からないという傾向がどんどん出て来ているということです。専門分化が進んでいきますと次第に水産業からだんだんはなれて、基礎科学といいますか理学的な傾向へ対象範囲が広がってまいります。そうしますと水産業から離れていきますので、大学改革などでは水産学部という名前は実態と合っていないから変えてはどうかという意見まで出てまいります。長崎大学の場合は、水産学部は1学科ですが講座は4あります。講座の名前を聞いてどういう研究をやっているのかということは多分分からないと思います。海洋生産システム学講座、海洋資源動態科学講座、海洋生物機能科学講座、海洋物質科学講座。昔あった「漁業」「養殖」あるいは「水産製造」といった名前はどこにも出てまいりません。そしてこの講座の名前を聞いてどんな研究をしていて、

どんな教育をしているのか、あるいは水産業とどういう関係にあるのかということは余程の人でないと分からないようになっていきます。教官にしましても水産業の実態をよく知らない先生の割合が少しずつ増えてきているように思われます。それで教育目標にしましても水産技術者の養成ということではくれなくなくて、多様な規定の仕方をしなくてははいけない。学生についても水産業に関心を持たない学生、卒業しても水産業と関係のないところに就職する学生も増え続けています。

(2) 大学と地域社会との関連

地域社会との関連では、一つは水産学部が開いている公開講座について、二つには水産学部が主体になっています大型プロジェクトの話し、そして三つには教官が地域社会とどう向き合っているかという個別事例について話しをしたいと思います。

水産学部は毎年公開講座を開いております。30年くらい開いておりまして、歴史のある講座でございます。それでどういうふうに公開講座を開くかといいますと、漁業地にでかけて、そこの水産関係者の方々に集まってもらい、どういう公開講座をお望みですか、という要望を聞き、それに合わせて5～6名の講師を立てるということをしています。ところが現地からのこういう話しをしてほしい、あるいはこういう知恵を貸してほしいという要望に応えられるような実践的・応用的な話ができる先生がかなり限られているのです。それで講師のメンバーはいつも同じようになっていくという悩みを抱えています。公開講座をやっている、「中身が現場の役にたっているかどうか」ということについてですが、最初に挨拶をされる学部長の決まり文句は「非常に好評である」というものです。その当否は別にして、私は公開講座の副次的効果に期待しています。副次的効果としましては、たとえば、現場の水産関係者と大学の先生との直接的パイプができる、大学の敷居はそれほど高くない、気楽に相談できるという雰囲気ができるということでありまして、二つめは公開講座を開いた後に懇親会を開くのですが、お酒が入りますと大学への期待など生の声が出てくるという意義があると思います。

次に水産学部が主体になっています大型プロジェクトの件ですが、二つぐら

いあります。雲仙普賢岳が噴火したことが有明海の漁場・生物・漁業に及ぼす影響についての調査・研究をしたことがあります。7～8年程前でございます。もう一つは今年から始めました有明海的环境変化とその漁業に及ぼす影響というものでございます。マスコミ等でご承知の通り、昨年ノリ養殖が大変凶作になりまして、諫早湾の干拓と関連があるのではないかとマスコミを賑わせておりますが、干拓との関係はともかく有明海的环境あるいは漁業を総括的に調査しようということで、たくさんの先生が集まり(水産学の先生が多いのですが)教育学部の先生、環境科学部、工学部の先生などにも集まっていたきまして総勢50人くらいの調査団を組み、5年間の予定で進めています。結果的に予算がつかいましたが、予算がつかなくても「地元の問題だからやろう」ということでスタートしたものでございます。結論的には干拓事業と結び付けて考えることができるかとは別にして地域の問題に対して、さまざまな専門家を集め、学部の壁をのりこえた総合調査の在り方あるいは大型プロジェクトの在り方をして検討しているものです。

そして三つめに、個々の教官が地域社会とどう向き合っているのか、ということについてでございます。地域とのかかわりについては、水産学部は人数の割にはそうしたタイプの研究が多いのかなという気が致します。これは主に調査・研究関係ですが、水産あるいはその周辺の分野について、国や自治体あるいは水産関係の協議会や委員会などにかかわっています。全体として水産学部は産官学連携を実施しているといえるのではないかと思います。

最後に一言だけ申し上げますと、これからの方向ということで私が二つ考えていることですが、水産業の現状の中で自分の研究あるいは役割をどう位置づけるかということです。もう一つは大型プロジェクトや総合プロジェクトを組んで対応していかなくてはいけないということがあります。この二つにつきましてはまた後で時間がありましたらお話ししたいと思います。どうもありがとうございました。

3. 管理される社会と教育：(上藺恒太郎教授：教育学部、キーワード：「教育(虚学)」)

キーワードは「教育(虚学)」ということでございます。私のポジションは教育学部の中の教育学教室の中で教育学という看板を掲げているところでござい

ます。ですからキーワードは「教育」ということになります。「教育」というのは実は多分分かっているんだけどわからないことなんだろうと思います。と言いますのは「教育」というのは習ったことがない、社会科、理科とかは習ったことはあるかもしれない、しかし教育というの習ったことがない。だけどずっと学校の中にいるわけです。「教育」というのは勉強したことがない、だけどずっとその中に居たことなんだという奇妙なものになります。



【写真：H13年公開シンポジウム】

片岡先生が「実学」をいうことを言われましたが、そういう意味では「虚学」なんだと思います。「実際に何をどのようなことをするのか」を言われると「え！」というところがあります。石松先生のお話を伺っていて、「教える」とか、「学習する」とかということをもっとく吹き飛ばすぐらいの実践で、結構なところだなと思います。

教育学部というところはデパートみたいなところがあります。理科の先生、工業技術の先生、音楽の先生、美術の先生とあらゆる分野の先生がいらっしやる。だからほかの学部と話をするとき話がかしにくい。工学部や水産学部とかは「こういうところをするところですよ」という一つのイメージでとらえることができるのでしようが、教育というところはとらえどころのないところなんだと思います。

ところがシステムということを見ると、教育というシステムは今これ程、はびこっているシステムはないと思います。片岡先生が「公開講座が……」と言われるときは、それは教育のシステムのことです。そして皆さんが小学校・中学校等等など十数年教育を受けてきたことになります。そしてもっと良いことに、あるいは悪いことに、大学が地域に開いて公開講座なりやってそしてみんなが卒業して、また公開講座を受ける、ということはまた教育のシステムの中に入って来るということになります。大学が地域に開いて地域のために貢献しようということは、それは良いことに聞こえますが、それはいつまでたっても大学のテリトリーの中から、教育の枠から逃れることができませんよというこ

ともなる。せっかく教育から離れて卒業して「あんなもの嫌だ」と思いたいのに、また何か大学から支援を受けないと勉強できないということになる。

近代という時代は、大体17世紀ぐらいから考えていいので、そこから「教育」というのは整備されつづけてきました。細かいことは資料に書いてございますが、「生涯学習」というものが出てきましたが、最初は子どもの教育から生まれた教育が生涯大人の教育も含めるということになります。それは良いことのように思うけれども、ある意味では一生、学校から離れることができないのだという、言わば「教育」と一生付き合うことになると思います。問題はいろいろあって、子どもたちが学校へ行くことができるようになって、少なくとも十数年間は学校へ行って勉強して、「それが一体幸せなのか」と問うたときに、必ずしも幸せではないのではないかと思ひ始めたら、生涯教育あるいは生涯学習ということは「教育」と一生つきあわなければならない、ということですのでこれは果たして幸せなことか、という疑問も出てくるのです。

生涯学習が広がる背景は二つあると思います。一つは社会全体が学校化するようになった。職業訓練を受けて、ある技術を身につけるとそのまま一生食べていけるわけではなくなった。そういう状況がうまれている。だから大人になってからの勉強が重要になってきたということがあります。もう一つは子どもと大人の間が区別がつかなくなってきている。子どもの時期を過ぎると、大人というのがはっきり見えていたものです。例えば、結婚するとか経済的に自立するとかで、明確に子どもと大人が区別されていたのが、だんだん区別できなくなってきました。大人が子どもなってしまっているという状況が生涯教育とかいうものを広げる要因になっていると思います。こうしたことを考えると「教育」というものは数世紀前には「啓蒙」と称して明るい未来を約束していたのが、揺らいでいる。そうした視点も含めて、大学が地域に出て、しかもさきも皆明るくなるかのように言うのは問題ではないかとあえて問題提起しておきたいと思います。

4. 地域循環：地球から地域へ、地域から地球へ

(姫野順一教授：環境科学部、キーワード：「地域循環」)

(1) 地域に素材があるというに目を向ける

地域と向き合う大学ということですが、私が取り組んでいる古写真の研究という側面を紹介したいと思います。古写真は私の研究の一端でございますが、私はもともと経済学の歴史を研究している中から現在をどのようにとらえ、どのような未来を描くのかというところにあります。私の話しのキーワードは二つあります。一つは環境科学部



【写真：H13年公開シンポジウム】

学部でもよく言われていることでありますが、「地域から地球へ」「地域から世界へ」ということを古写真にからめて考えていることです。第二に、「地域循環」の視角から考えるというのがあります。私は、「地域にこだわる」という視点から物事を考える場合に、かれこれ15年以前になりますが、長崎の古いリアルな映像をとらえているにもかかわらず、地域に目をむけていなかったということに気づきました。幕末から明治にかけて、長崎が歴史的に光った時代をリアルに映した映像が何百枚も残っていて、長崎では忘れられている、という実態を知りまして、文部省に予算をつけてもらって長崎大学図書館で日本の古写真を収集しました。これは大変な情報量を持っておりまして、古い長崎の知恵、実態、日本の古い姿を見ることができます。いろんな昔の知恵、料理の仕方、建物の立て方、風土にそったいろんな知恵が隠されているのです。そしてそのような知恵は、日本が今近代化されて随分姿が変わってきています。そして、古いものにたいする関心が高まっているという現在、私たちは古写真についてインターネットのデータベースとして世界に発信致しました。(写真①古写真のデータベース) 長崎大学のホームページの図書館の英語バージョンの古写真へ世界からのアクセスは1年間で2万5千件、2年で5万件のアクセスがありました。日本からの関心もそれより少ないものの、優良サイトになっています。大変な関心があるということが分かりました。ミクロのローカルな世界とマク

ロな地球というものがつながっているわけですが、古い良き日本への関心というものが映像で見られ、現代の対話しているわけです。皆さんも簡単に見ることができるので見てください。来年はさらに、工学部の岡林研究室との共同で、写真の部分を瞬時に拡大してインターネットの画像で見ることができるように改良しています。そのように長崎には地域に素材があるというに皆さん目を向けてほしい。そしてそれがまたこれが世界に広がるということを発見して欲しい。



【写真①：写真①古写真のデータベース】

(2) 環境への取組

次の問題は環境への取り組みです。私は環境科学部に所属するというところで、経済学の歴史の勉強から環境経済学への取り組みへと徐々に研究テーマを移しているところですが、この夏イギリスに行き、大きな衝撃を受けました。ウェールズに代替テクノロジーセンター (CAT) というものがあります。これは環境研究のある種の方向を



【写真②：CATの「水力昇降ケーブルカー」の写真】

示していると思います。ローカルな素材を使って、水・太陽・風力といったエネルギーを作り出し、そこで循環させ、完全にローカル・コミュニティが循環するシステムができあがっているのです。ケーブルカーは水で上げ下げするとか(写真②ケーブルカー)、家の壁は土であり、屋根は草といったエコハウスとか、見事な緑の使い方、トイレは完全に有機トイレで匂いがせず循環して畑で使用できるようにしていますし、動力としてあまり強力な電気を使うということはないようにしています。また出された廃棄物は完全にコンポストにされそこのハーブ園や菜園で循環がなされています。そこにある多面的な素材から

エネルギーが作られ、コンピューターで管理され、余れば外部に売られています。このような仕組というのを見まして、人間が未来に住む環境を作っていくというということは、ローカルな仕組がこのように循環型に変わっていくことではないかと思うのです。

一言だけ付け加えますと、ここの教育学部に昔小松先生という方がいらっしゃいました。定年退官後、大村で月光の里という理想のコミュニティ作りをしておられまして、全国から人生の意味を悟りにくるという道場をやっておられたのですが、先生が亡くなられた後は少し荒れていいいます。これなんか再生できないかという話しをしかかっています。ここを今言ったウェールズのCATと同じように学生のボランティアでできないかと思っています。

長崎県にはまちおこしの試みととして、県に未来塾、五島の椿塾というところがあります。また小さいところでは三井楽の万葉塾などがあります。私はそういったところで講師を3年くらいやっていました。当時私がやっていたことは、物作りを起こしつつ就業を起こしていくということで、これは非常に重要な視点で、この点は今でも変わらないと思います。そこで地域の資源を発見するということを強調していました。しかしそのことでもう少し地域の住みやすさを改善し、それを地域循環あるいは地域の環境循環と結び付けるということはあまり考えてこなかったように思います。そこでここ10年ぐらいで大きなそういう意味での考えの「視点」の変化が起こってきているような印象を受けます。

最後に諫早湾の取組みを紹介します。私は昨日まで神戸で閉鎖性海域の保全についての国際学会に出ていました。この学会では諫早湾の問題として生態系をどのように維持するかという特別なテーマが掲げられていました。私自身は、ごく最近から研究テーマとしまして干潟の生態系の経済的価値をどのように測るのかということにつきまして考えています。これは人々がどのように問題に関心を持ち、諫早湾の干潟の価値をどのように評価するのかという問題です。仮想的価値評価法(CVM)と呼ばれるものです。これまでの環境影響評価のなかのCBA(COST BENEFIT ANALYSIS)「費用対便益」あるいは「費用対効果」の分析の中に、この「環境の価値」は含まれていませんでした。CVMの評価を中にいれる仕組みをつくらなければならないと思います。研究には参加型の研究と個人でできる研究があって、環境研究というのは参加型の研究にな

らざるを得ないというところがあるように思います。そういうふうな意味では、地域の中で参加型の中で環境問題の解決を考えていかざるを得ないというところがあると思います。CVM 研究はそのようなタイプの研究です。これと絡めて地域の循環を考えるという視点の中でいかにボランティアあるいは NPO あるいは NGO というふうなあたりをうまくネットワークしていけるかが大きな課題ではないかと思うのです。同時に干潟の問題は、例えば韓国の西海岸というのは干潟だらけで、干潟の保全というものはアジア近隣としても非常に関係している問題です。ここでも地域から地球へローカルからグローバルという視点が重要だと思います。

5. 日本の生涯教育：生涯学習が生きる制度が求められている

(門司和彦教授：医学部、キーワード：もっと暇になろう)

キーワードとして考えられるものにはいくつかあるでしょうが、私は第一に健康、健康に関する生涯学習、第二に知の社会的意味、何のために生涯学習あるいは勉強するのか、第三に大学制度改革、今の大学制度のなかでどのようにして生涯学習を供給し、受ける側が受けるか、第四に暇、もっと暇になろう、みんな忙しすぎる、忙しすぎ



【写真：H13年公開シンポジウム】

る中で生涯教育といってもいかがなものか、余裕を持って知的生活とは何かを考えることが重要ではないか、といったものがあるように思います。

もともと私は人類生態学という学問をやってきました。病気がどのようにして起こるのかという「疾病生態学」、人が病気をどのように考えるのか、病気がどのように社会に影響しているかという「医療人類学」を考えてきました。インドネシアとか南米のアンデスの高地に暮らしてみても人がどのように死ぬのかな、何を食べているのかとか、どんな病気になるのか、ということ調査してきました。長崎の公衆衛生学教室にきまして、たまたまそのころ老人保健法とのかかわりで健康教育を地域でしていかななくてはならないということがあり、

随分地域に入っていました。そこで地域の人と生活レベルで健康とはなにかを分かりやすく話し、生涯健康で長生きして、できれば安らかに逝っていただいて医療費を安くおさめるという話をしてまいりました。公衆衛生を考えると、すべての人々が自分で健康について考えてくれないといくら制度をいじってもしょうがない、と考えています。福祉の部分の厚くして、福祉に対してどういうふうアプローチしていくかは石松先生が実践されている通りであります。

先週、地域医療学会が長崎であり、若い人に対して福祉学習を徹底してやっていくことと、生涯学習の中で福祉生涯学習と健康生涯学習というのをこれから力をいれていかななくてはならないことが言われていました。それ以外に私は「健康ながさき21」というのを自治体などでやっていて、タバコを吸わない環境づくりなどを考えてまいりました。これも県民あるいは国民一人ひとりがやってくれないと意味がないので、そういう意味で生涯学習は非常に重要だと思っています。

しかし、生涯学習や地域貢献には多くの問題があります。既に地域保健計画などで17冊程県の報告書や計画書を書いたのですが、それは大学ではちっとも評価されないんですね。忙しくてどうやって健康になれるのかというのを徹夜で考えるという、非常に不健康なことをやっているわけです。生涯学習についても、長崎県には生涯学習教育研究センターや県民大学さらにはまた放送大学もごぞいます。週末をつぶして十何時間教えるにいかなくてはなりません。そういったものをもっと良い形で統合して、どういう形で生涯学習を日本でやっていくのかを考えてるべきだと思います。外国ではコミュニティ・スタディ・センターがたくさんあって非常に使いやすくなっています。先程石松先生がおっしゃったこととか姫野先生がおっしゃたような非常にいいシステムがあります。日本の生涯学習とは似て非なるものです。それは学問というもの、知識、知というものを社会の中でどのように位置づけるのかについて、日本は知は借りてくる形になっているのがいけないと思います。

キーワードにもどりますが、システムを考えるときには、皆が暇にならなければなりません。午前中だけ一生懸命勉強するけれども午後は君たちは自由にしてい。その中で君らは何を考えるのかというふうにして学習していいわけです。朝から晩まで授業がつまっていればそんなことできるわけありません。

働く人についても忙しすぎて生涯学習はリタイアした人だけのものになってしまうわけです。それから皆がもっと貧乏にならなければいけないと思うのです。貧乏になったとき始めて「勉強したときに何が役に立つか」と真剣になりますし、考える側ももっと給料が安くなって生涯学習センターに行かなくては食えないとか放送大学にいかないとか食えないというふうにならないと教師も真剣に教えない。今のシステムでは良い講義をした先生に来年またやってくださいというのは刑罰みたいなものです。講義をやったらメリットがあるようにしなくてはならないと思います。そのためには皆が暇にならなくてはならない、そのためには先生の夏休みは3ヶ月から4ヶ月なくてはならない。教える側も教えられる側ももっと暇にならなければならない。大学が独立法人化すればもっと暇になるかといったらそうはならないでしょう。なぜならば非独立法人化だからです。私の考えでは文部省こそ分割して独立法人化しなくてはならないと思います。そうすれば日本の生涯学習は良くなると思いますが、現実はそうならないでしょうから、そういった中で日本の生涯学習を考えなくてはならないのです。

3節 ディスカッション(第1幕)：専門化・細分化社会と管理教育

司会(糸山)：片岡先生におたずねしたいのですが、水産学ばかりでなくいろいろな学問分野で細分化され、裾野が広がっていけばいく程水産学部と同じような状況になると考えてよいのでしょうか。

片岡：どこの学部でもどんどん分野が広がって境界領域があいまいになってきました。水産学部とか環境科学部とか海洋学とか工学部に近寄ってくるとか、お互いがどんどん広がってオーバーラップしていき、それを統括し、一つに束ねていく哲学というか原論というものがながいしろにされてきたように思います。それができるスーパーマンみたいな人がいなくなってきたように思うのです。

司会(糸山)：上藺先生と同じ質問ですが、「教育(虚学)」というのがキーワー

ドということですが、「教育（虚学）」はある意味では実学ではないのでどこにでも入って行ける学問分野ではないかと思うのですが、その場合、「教育」は哲学というか総論というものが作りやすいのではないのでしょうか。そうでもないのでしょうか

上 菌：今の状況からすると作りにくくなっているような気がします。昔一冊本を書いてその名前がといますと『知識学の基礎』（WISSHENSCHAFT）という言葉を使っていますから「全学問の基礎」というか、つまりこれ一冊読めばそれで良いといったようなことがあったのですが、今「全学問の基礎」といって一冊書いてやれる人はだれもいないのではないかと思います。むずかしくなっているのでしょうか。しかしむずかしいといっておれなくなっているように思います。今の小学校でも理科は理科、算数は算数とわかれてしまっています。理科は理科、算数は算数とわかれて教えるとウソを教えることになることもあります。どういうことかと言うと、理科で表面張力というのがあって、一杯になったからといって漏れるのではなく、少し盛り上がって、突っ張ってから漏れるということがあります。それを算数では「一分間に何リットルも入る大きなタンクの中にどのくらい入れれば水がこぼれるようになるか小数点第一位まで出さない」という問題があって、友達と「小数点第一位までだせというんなら、表面張力によって違うよな、それってどうやれば出せるのかな」と疑問に思って、先生のところに行って、「表面張力の分ってどう計算するのですか」と聞いたら「表面張力の分は算数では計算に入れない」ということになって「え！ウツソー」となるわけです。このようにバラバラに教えるとウソを教えることになる場合があるのです。だからどうすれば良いかという言うとき「人間学」ということになるのでしようが、なんとかしないと私たちの生活は「学問という真実のウソ」に囲まれてしまうことになるのではないかと思います。

植 本：上菌先生にお伺いしたいと思います。私の個人的意見かもしれませんが、「学習と教育」という場合、「学習」と「教育」では主体が違うのではないかという印象を私は持っているのですが、その違いと、「地域と向き合う」というとき「教育」なのか「学習」なのかという点についてお伺いしたいと思います。

上蘭：学習か教育かは延々と議論してきたテーマですが、一般的には「教育」ということばで済ませています。生涯学習は、最初は生涯教育という言い方をしているのです。この年表では1960年代あたりは全部成人教育だとか生涯教育とか語られているのですが、「教育」というのは教える側の問題ではないか、市民が自分たちで選ぶ「これは自分に役立ちそうだ」とか「これは面白いからやろう」とかいうのは「教育」ではなくて「学習」ではないかと変わってきた歴史があります。長崎大学でも生涯学習教育研究センターと言っています。しかし今は政策側からは「社会教育」という用語を使い始めていますが、そういう逆向きに見える流れもあります。新田先生の方からも少し追加していただけますか。

司会（新田）：上蘭先生の年表では1960年代では「教育」というのが出てくるのですが、「学習」というのが出てくるようになった背景には学習者の主体を大切にするとところがあると思うのです。そうしないと学習効果が上がらないと最近では言われています。私も最近授業ではレポートで評価するようにしています。その理由はレポートの書いている内容でもって、学生自身が自分の学習を自己評価できるようにしているのです。ただ単に授業の内容をまとめただけのレポートなのかあるいは次の課題が出ているレポートなのかということを見ればそういうことで「学習」の習熟度が分かるわけです。そういう意味でまさに学習者が主体となる授業というのが非常に重要だと思うのです。そういうことが生涯学習に通じるのではないかと思うのです。

しかし1960年代というのは高度経済成長の時代で、工業中心の管理社会ですので、労働現場は徹底した管理社会になっています。したがって、どうしても人々にはそうした管理社会を担うあるいは適応できる能力あるいは労働力の育成を求められていたわけです。それが「教育」として制度化され、近代学校教育の歴史そのものがその歴史ではないかと思うのです。そういう意味では上蘭先生がおっしゃるように、生涯学習の時代というのは近代社会が始まって以降の社会が大きく転換期を迎えている社会の教育理念として生まれてきたものだと思うのです。しかしまだまだ流動的でこれが生涯学習というものはないので、こうやって大学の先生方と学生が話し合っ一緒に生涯学習を考えていこうと

しているのです。

上蘭：そうなのですが私が考えているのはもう少し先のことでして、学習と言おうと教育と言おうと「教える者」がいて、「学ぶ者」がいる、「学ぶ」ことは「教える人と学ぶ対象がいるという構造」をはなれてあり得ない、この構造をはずして「勉強」とか「何かを知る」ということができないのか、ということです。つまり学校に行ったり専門家がいて、アドバイスしてあげないと、例えば諫早湾のことにしても専門家のデータがないと動かない、そこにいつも専門家がいてそれを聞いて勉強しないと分からない、というシステムを、われわれの「勉強」意識は越えていないことです。近代のシステムはこうした専門家を作り、専門の場所を作って、それで囲い込まれた場所が例えば学校だったと思います。果たしてそれで良いのか。「環境に優しい」というとき専門家が環境に優しいという手引きを作ってやらないとできないのか、ということ、それはちっとも優しくないのではないのか、そこまで考えたとき始めて「主体的」という意味が生まれてくるのではないのでしょうか。

司会(糸山)：上蘭先生が先ほどの発表の中で、大人を含めて教育の社会システムから逃れられないということはそのことでしょうか。要するに社会全体が一つの教育システムを作り上げざるをえなかったのが近代社会だったということのようです。それでは後半の部分の司会を新田先生に引継ぎたいと思います。

4 節 ディスカッション (第 2 幕) : 各論

司会(新田)：それでは後40分程、自由に議論をしていくことができればと思います。議論を深めるために私の方から各パネラーの方におたずねしたいことがあります。まず石松先生におうかがいしたいのですが、今の長崎大学の場合でもそうですが、非常に数多くの先生方が社会の抱える課題を研究として取り上げられています。高齢者の生活支援研究会といった現代的課題、あるいはまちづくりといった地域的課題など、石松先生の高齢者支援研究会というのはまさに長崎大学における地域貢献の良い事例だと思うのですが、私たちが通常考え

ている「研究＝産官学連携」というイメージとは少し違うような印象を受けます。通常「産官学連携」というと企業との先端科学技術研究というふうに言われていると思うのですが、石松先生の「斜面研究会」とか「高齢者支援研究会」というのはこれも一つの研究開発をめざすものではありませんが、いわゆる「産官学連携」とは違うように思えるのですが、石松先生は「地域と向き合う」いう場合、どういう方向を考えていらっしゃるのでしょうか。

1. 上ばかり見ないで、自分の足元を見よう（石松教授）

私はこれまで画像処理とか溶接ロボットとか要するに産業界に目をむけていたのです。大学も日本の企業は産業界をいかに高めてヨーロッパや外国に追いつくかということを考えていました。私の若い時もそうでしたし、そういう方向で今でもそういう意識の先生は大学の中に一杯いらっしゃいます。みんなミサイルを作ったりなど一生懸命上ばかり見ていて、家に帰るとお年寄りが寝たきりになっていて奥さんにまかせきりになっていたりするのです。これはおかしいですよ。良く考えると僕らの科学技術というのはいったい何のためにあるかといいますと、人間の平和のためであって、産業界のためでないのではないかと思います。そう考えると変な矛盾があちこちに生じているような気がします。今私の研究室で取りくんでいるのは、自分の足元を見てみましょうということ、よく見ると僕たちの科学技術は生活のあちこちにあって。そういったデモンストレーションをやっているつもりです。学生の皆さんはいろいろ勉強していると思いますが、大学の先生も一生懸命研究やっっているながら、気が付いてみるとある一定の方向しか見ていないということになっていることが良くあるということです。もっと自分の足元にもたくさん課題がある。そこらにも私たちの習っている、例えば私の研究室では学生なんかにも半導体、論理回路設計などコンピューターを使ってやらせていますが、それはミサイルをつくるためではなく、自分の目の前のお年寄りの手が動かないその人達のためにも使える研究をやらせているのです。すぐにはお金もうけにはならないけれども、大切なのはそういう分野が欠けているということです。

司会(新田)：ありがとうございます。社会が抱えているいろんな問題の中で石

松先生はお年寄りの生活現実にも目を向けていらっしゃる、それを機械システムという専門の立場から研究対象にしている。そういう研究者が大学で教育をする場合、学生諸君にあるメッセージを伝えようとしている。ミサイルを研究している研究者と、足元の生活問題を研究している研究者と両者が教育をやった場合、学生諸君に伝えたいメッセージはかなり違うと思います。石松先生の場合は「足元を見よう」ということです。石松先生の研究室は大学の中で公民館をやっているようなところで、いつでも誰にでも開放されていて、いろんな地域の方々がお見えになって大変面白い所だと思います。ありがとうございます。

2. 資源管理・漁業管理の時代と大学（片岡教授）

次に片岡先生にお伺いしたいのですが、私は壱岐などでの公開講座を通して、水産学部の先生方と一緒に地域の水産業の勉強をさせていただいています。水産業というのはハイテクであり最先端科学であろうと思うのですが、そういった最先端の科学を駆使して水産業がなりたっているそういう産業が資源枯渇とか栽培漁業の環境汚染の問題とかいったいろんな現代社会の発展と問題も同時に抱えているのが水産業の現状だと見受けるのですが、水産業についての教育・研究の将来はどうなるのでしょうか。また、食料問題の展望といったことに関してどのようにお考えでしょうか。

片岡：まず最初に言いました水産学は実学だということですが、これは水産学だけでなく農学も実学に近いところがあります。その理由は比較的農業や漁業というのは国際的競争力がない、また従事している人々が多いのでその方々の生活の安定を図らなくてはならないということで国からいろんな補助金が降りているのです。産学共同は古い言葉かもしれませんが、水産あるいは農業という面に限りますと、農民のため漁業者のためという大義名分もあるわけで、

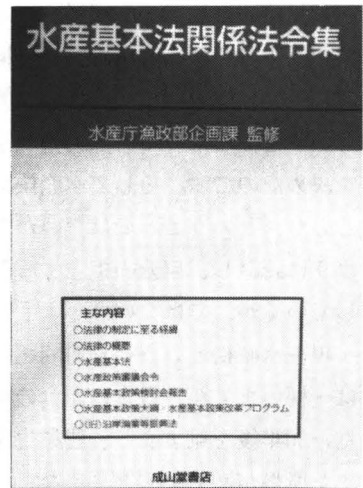


【写真：長崎県水産基本計画写真】

水産が抱えている現在の課題に水産学に携わっている教官としてどうするのかという質問だと受け止めます。

水産業が抱える課題は二つあります。一つは東シナ海において典型的ですが、日本と中国、韓国との間に新しい漁業協定ができたのです。そして海に線引きしてお互いの領域に入り込まないようにして、そのかわり自分の領域の中では資源管理をしようという取り決めが最近出来ました。したがって、これからは自分の割り当てられた海域の資源管理や漁業管理をいかにしていくかということが重要になってきますから、これまでのように自由競争、先取り競争ではなくて、先取り競争をやるから資源が枯渇するというのではなく、資源を管理、漁業を管理しないといけないということです。科学者の出番がこれから増えるであろうと思われます。資源管理や漁業管理の在り方によって水産業が右にも左にもずれるのではないかと思います。

二つ目は、今年の五月でしようか「水産基本法」というものができました。水産について基本法という名前がついた法律ができたのは今回が初めてです。高度経済成長期に「沿岸漁業等振興法」というものができたのですが、その後、社会情勢が変わったので基本的な考え方や枠組みを組み直そうということで今年できたのです。4つぐらいの柱があります。一つは水産物の自給率が下がってまりましたので、これから10年かけて自給率を高めないといけないということで自給率の数値目標を決めたことです。二つ目は資源の持続的利用です。乱獲で資源を減らしていけない。適度に漁獲すれば最大の漁獲を永続的に利用できるシステムをつくらうというものです。三つ目は、漁業経営の安定とか漁業就業者の確保、四つ目には漁村環境の整備などを柱として水産基本法ができました。昨年度、長崎県では長崎県長期総合計画というものができました。その水産版として、長崎県水産業振興基本計画というものがつくられました。



【写真：水産関係法令集写真】

10年後の長崎県の水産業のあるべき方向はどのようなものかということについての報告書ですが、長崎県の長期総合計画に沿っていますし、水産業基本法の本質を受け継いでいます。具体的に長崎県で10年後に水産業をこう致しますよ、という目標をたてて、部局編成をし、予算を重点的に投資します、ということを決めたのです。そして水産業にかかわっている人々がこれにどうコミットするのか、ということではないかと思われまふ。社会的ニーズ、地域課題をどのように認識し、自分の担当する教育や研究をどのように位置づけ、役割を果たしていくか、ではないでしょうか。

現在水産物という食料問題の一つですから、食料不足にあえぐ世界の人々は一歩ありますが、日本は飽食の状態にありますから当分は大丈夫だと思ひます。ただ30年後を見ますと、農業生産量は頭打ちになるし、人口は急激に増えます。また所得が増えますと食料などの消費が増えますので、深刻な食料問題が顕在化してくるのではないかと思ひます。そのときに「ああ農学部や水産学部で学んでよかったな」ということになるかも知れませんが、それまで水産学部があるかどうか、ということには分かりませんが。

司会(新田)：どうもありがとうございました。片岡先生のお話しは、資源管理とか漁業管理といったように、これからは「獲る取る競争・乱獲」から「資源管理」の方へ行かざるを得ないということで、大学あるいは科学者の役割はますます大きくなるのではないかと、ということでした。片岡先生にもう少しお伺ひしたのですが、そういうとき、今ここで議論されている内容を地域の人々にもっと知らせる、とか大学や科学者の役割とか「大学知」を外に知らせるとかいうことはどのようにすれば良いでしょうか。

片岡：もちろん水産基本法に書いている4つの大きな目標というものとは現実とは違つた方向に動いていて、水産業は縮小しているのですが、水産基本法で全体的にこのような方向を目指すということは個別の漁業者には行き渡らない面があります。日本全体の水産物の自給率をどう上げるかということと、長崎県のある地域の漁業者の生産高をどうするかということとはなかなか結び付きませんし、一部の地域の人だけで資源管理・共同管理をやろうとしても全体の管

理をしなければ、自分たちだけでやってもほかの人達が守らなければ効果はありませんし、なかなか難しい点はあると思います。いろんな協議会や発表大会や講演などそういうたびに繰り返して話したり、相手の意見を聞いて計画を立てるしかないと思います。

司会(新田)：ありがとうございます。皆さんも是非水産基本法というものを勉強してみましょう。とにかく一国民として日本の水産業の現状や将来を知る必要があると思います。

3. 科学技術開発と同時に人に優しい教育システムをどう作るか(上菌教授)

司会(新田)：上菌先生にお伺いしたいのですが。上菌先生は資料の中で、こう書いていらっしゃいます。

生涯学習を論じる背景に、1. 社会の学校化、2. 子ども概念の揺らぎがある。生涯学習の拡大は、啓蒙思想に始まった近代教育の爛熟であり、社会の学校化によって受け入れられている。また、大人と子どもの境界が消失したというだけに止まらない、子ども概念のいわばフィクションを明るみに出そうとする論がある。すなわち、子どもは、いる(もともと存在する)のではなく、子どもは概念として、具体的には学校による囲い込みによってつくられてきたとの指摘がある。

これは大人の危機、大人としての社会性あるいは公共性の危機としてとらえて良いのでしょうか。もしそれが許されるのであれば、今までの学校は何をしていたのか。子どもたちにしても、今まで学校の先生や親の言うことを素直に聞いてきて、その結果として今国立大学(長崎大学)に合格できたのですが、いざ卒業するときに就職が困難になっているという時、子どもからしてみると、「今までの学校教育が問われている、といまさら言われても僕たちはどうなるの」と言わざるを得ないことではないかと思うのですがいかがでしょうか。もし大人の危機があるとするならば、教育の在り方が問われていると言ってもいいのではないかと思うのですが。先生は「教育」というのは「虚学」だとおっ

しゃいしましたが、「虚学」というのは時にして人々の心や内面まで、深く入り込んで計り知れない力を発揮することがありますが、逆に、今はそれが危機だということでしょうか。そうなら今後どうあるべきか、あるいはどういう「教育」が今後必要とされているのか、そのあたりを今少しお伺いしたいのですが。

上 蘭：石松先生のお話しをお伺いして、日本の教育が抱えている問題はまさにその通りだと思いました。つまり日本の教育というのは、いわば優秀なグローバルに通用するものを作り続けてきたわけで、日本の子どもたちは何年か前までは世界で試験をしても算数ではトップだったのです。また日本の小学校みたいにプールがあって運動場があって、体育館があって、すべての教科を教えるシステムが揃っていて、皆は教科書を持っているということで、という国は世界でも珍しいのではないのでしょうか。ドイツで、「日本はリッチだから」と言われたことがあります。ドイツでは「前の学年の人達が使った教科書を次の学年が使いますから書き込んだりしたらいけませんよと言われるのですが、日本では毎年新しい教科書をすべての子どもたちに配布するなんてなんてリッチなんだろう」と言われて、「なるほど」と思ったりしたことがあります。そういう意味ではすごく優秀なものを作ってきたわけです。試験すればトップだという子どもたちを作ってきて、気が付けば高齢者が寝たきりになり、学校ではいじめで子どもたちが死んで行くといった状況を生み出してしまったわけです。それならばそのシステムを解体して一人ひとりにあった教育を作ろうとすると、皆嫌だと言うんですね。日本全国統一の教育をやめて長崎だけの教科書をという「それは止めてよ、学力が落ちてしまう」と皆さん言うのです。やはり長崎で勉強しようとしてどこで勉強しようとして東京で通用する学力はなければ困るというのです。子どもたちをどこでも通用する人にしないと、世界に通用するといふのでなくては、困るというわけですね。この大枠を崩さずに人に優しいシステムをどうつくるか、ということは、グローバルでありながら、どうやって足元の課題を救うかという二つを一度につきつけられるところがあるのです。例えば、いじめにどう対処するかという点については、長崎県では一つ一つの学校に心理関係の人ばかりでなく、教育学者も法律の分かる人も行って二人で支援しようとしていますし、また長崎大学教育学部にもカウンセラーを置いて

います。そうやって各学校を支援するシステムを作ってきました。今度は日本全国で行われている教員システムを変えることになると、私が出て行ってどう助けるかという問題ではなく、逆に私はだんだん表から見えなくなっていくのです。つまり教育学部の教員養成システムをどう変えるかということになると、外からまったく見えなくなる教育学部の中での仕事ということになるのです。見えないシステムを、内面にまで入り込んだ力を変えるには、自分が外から見えなくなりながら、全体のシステムをやわらかいものに変えていくしかないと思います。システムのしなやかさ、その一つの表われは、門司先生がおっしゃるように、暇があるかということだと思いますが、それが一つの方向ではないかと思うのです。

司会：ありがとうございました。暇になると考える、暇になると考えないで遊ぶだけというものもありますが、「暇」ということと「考える」ということとは密接な関係があるように思います。今の教育システムは人々に暇というか余裕を与えないシステムになってしまっていて、そうなると人々はゆっくり物事を考えなくなってしまっているのではないかと思うのです。物事を深く考えるシステム、教師は考える人でなくてはならない。そういう教師を養成する教員養成システムにしていただきたいと思います。

4. 効率と折り合いをつけるものは倫理の力（姫野教授）

姫野先生にお伺いしたいのですが、姫野先生はキーワードとして「地域循環」と提示されました。ところで今の社会はいろんなところで循環できない社会になってしまっているのではないかと思うのです。例えば、人的資源や社会資本が大都市に集中し過ぎて力関係のバランス崩れ、地方の力が弱くなってしまって循環なくなっています。壱岐の高校生は卒業すると9割以上が島外に出て行ってしまって帰ってこないと聞いています。また姫野先生は「参加型の研究」ということも提示されました。私も同感で、広く市民あるいは学生が参加できるような学習なり研究なりが必要ではないか、あるいは社会でそういったシステムを作らなくてはならないのではないかと思います。もし大学がなんらかの形でそうしたシステムの中心になることができるとするならば、大学そのもの

が参加型の大学にならなくてはならないと思うのです。学生や社会人に開かれた大学、そうした参加型の大学になるならば、そうした大学を中心にしてできる社会は参加型の社会になるのではないかと思います。私はその時、大学の役割、特に「知識・知の生産」という時、学生や社会人が「知の学習や生産」に参加するにはどうすれば良いのか、その在り方について是非先生の実践の中から伺いしたいと思います。

姫野：皆さんの前の議論と今の質問とからんで、私が今考えていることからお話しします。先程の「管理型の生涯教育」から「生涯学習」に変化という上菌先生の話を私なりにうけとめてお話するのですが、近代の「生産性を高めて行く力」ということは一方ではどうしても作用していくところはあるわけです。そこに人間がどういう「折り合い」をつけていくのかということを上菌先生はおっしゃっているように思われます。例えば、市場では「効率」というものを一方で追求しているのですが、他方では「値打ち、価値、人間的価値」というのはそれとは違うということをきちんと認識していくことが重要ではないかと思えます。つまり一方では「効率」ということを知っておきながら、他方でそれを別の力で押さえるということ、もっと平たく言えば、経済学でいうならば、「効率」というというのは企業としては儲けるということであり、消費者が最大満足というものを市場でお金で払っていくということです。しかし他方では、企業としてももうからない側面があっても、価値的にはやらなければならないということもあるということです。消費者も必ずしも金銭では利益にならないこともあるかもしれないけれども、値打ちがあるものについては正当な行為も認められてもよいのではないかと、こういった、「倫理の世界（価値）」というものが効率と折り合いをつけていくことが重要ではないかと思うのです。これが私の基本的考えです。

次に司会者の質問ですが、例えば東京集中とか福岡集中とか言う一極集中の問題ですが、中期的トレンドでみると九州に人口流入の転換が見られたのは10年程前でしょうか、現在では流入超過で、Uターン、Jターンという現象が現れていて、こうした地方への還流が基本的な流れとなっているように思います。もっとも、福岡への一局集中、地方都市への集中の問題は残ります。さて大企

業でいますと電力など、エネルギーなどでも、化石燃料を使うから大規模な資源の移動が必要なのであって、先程水産業の地域における資源管理の話がありましたけれども、そういう意味でのローカルな資源というものを、ミクロの浦、町ということではなく、ある「ブロックでの資源」というふうな問題で考えた循環というものが重要になっています。どこかの範囲で囲い込んで再生産ないしリサイクルしていく仕組が将来必ず出てくると思います。その意味ではどこに囲い込む枠組みをローカルにどう誘導していくかという中長期的なプランが必要になってくると思うのです。したがってローカルな資源をいかに発見し、そう言った意味での循環をどういうふうにデザインし、提案していくかということが重要になると考えます。

そこで最後に大学が何ができるかという話になりますが、先程上菌先生が「囲い込んでではではだめですよ」という話にひっかけて言えば、地域づくりを「囲い込むのか、あるいはボランティアでやるのかどうか」ということが問題です。私は意図的に囲い込んでやらなければならない課題は大きいのではないかと思います。ですからそういった意味でのストラテジを持ち、今言った意味での実験的仕掛けを大学が提案していいんだと思うのです。ボランティアは大切だと思いますが、一方で日本のボランティアのパワーがそこまであるかという悲観的な問題もあります。例えば、今日非常に印象的なのは、この手のシンポジウムをした場合、外国の場合、フロアーから発言がないというのは有り得ないことです。必ず的確な質問なり、自分の問題意識からの質問があって、レスポンスがあって、「それじゃ」という話があるのですけれども、やはり囲い込んである実態になっているのは非常に残念ですね。ボランティアの経験なりフロアからのご意見があれば聞きたいのです。そういった意味での「知」の持つパワーがもう少し仕掛けられてもいいのではないかと思います。

5. 大学改革：沈み行くタイタニック号

（もっと自分の頭で考えて動く人間になろう：門司教授）

司会(新田)：最後に、門司先生からは今ご自分の専門のお立場から、トータルな議論をしていただいたのですが、最後にまとめの議論として次の質問をしたいと思います。健康・医療の現場とというのは先端科学の粋を駆使したもの

があるのですが、ふと考えますと、それほどの科学水準の時代に生きているのに私たちの日常生活は非常に不健康といいますか、自分の健康管理も満足にできない状態にますますなっているのは大変な矛盾だと思います。科学というものはそれを受入ることのできる成熟した社会があって初めて生まれ、機能していくはずなのに、医療現場の先端科学の水準と私たちの日常生活とは乖離しているといえますか私たちの不健康さ、自分の健康管理すらもともにできない状態とはあまりにも対照的で、一般の日常の人々には大学の医学部の最先端科学の情報は伝わっていないとか、乖離してしまっているのではないかと思うのですがいかがでしょうか。大学というのはそうした知識を生産しているのに何やっているのだろう、一般の人々には伝えていないのではないかと思うのです。知識の生産の場たる大学の社会的役割が問われているのではないかと思うのです。門司先生はどういう大学改革が必要かとお考えでしょうか。

門司：お医者さんというのは疾患、つまり病気のバイオメディカルな部分を見ようとするのですが、人間はそういったものでは悩まないものだと思います。癌になろうが何になろうが痛いものは痛いというし、死ぬときは死ぬわけで、個人にとってはその方が大切なのです。それは「疾患 (disease)」ではなく「病 (illness)」という概念で見ているわけです。また、病院に入って静かに寝ていられればいいのですが、そうすると子どもたちは食べられない、社会的に批判が出たり、差別をうけるとかがあります。これは「社会的病気 (sickness)」です。我々はバイオメディカルなアプローチは、ある意味で簡単だからどんどんやっていく。しかし人間全体をどうやって見て行くかとか、社会の中で人間がどうやったら健康で幸せになれるかを考えることは非常にむずかしいのです。いろんな立場や学問があるのですが、「illness」とか「sickness」の科学は非常に遅れています。こういった学問は閉じこもってやるよりもどちらかと言えば、社会に出て行ってやる学問であり、これからの学問だと思います。

しかし一方、大学は地域と向き合わなくてもいいとも思えます。「大学とは何か」とか「社会において何なのか」を必死に考えて、社会の中に何か意味があることをすれば地域の方が振り向いてくれるものです。こっちから向くだけが手じゃないと思います。引きこもりが問題になったとき吉本隆明という人は逆

に「引きこもれ」と言いました。人間が社会の中でアイデンティティを見つけるときには、引きこもって「自分はこれがやりたいんだ」ということを、何でもよいから、見つけることが大切です。

日本の大学改革は沈みゆくタイタニック号のデッキ上でデッキチェアの並べ方を必死で議論しているようなものだと言った人がいます。大学はもう沈む時期かもしれないということです。皆忙しいのです。去年はこうだったが今年はこう並べ換えろといわれて、必死で並べ換えようとしているんですね。皆忙しいのです。そう言えばバブルの時期も皆忙しくて死にそうでした。何が忙しいかということ、例えば銀行の支店が会社に融資しようとして争っていたのです。皆それが仕事だと思ってやっていたのですね。ところが10年後にはそれが不良債権となってしまったのです。何が仕事か何が忙しいか分からないところがあります。大学もひょっとしたら同じようにしながら沈むかも知れません。でも、「沈むかもしれないからそれは困る」といってしがみつくのではなく、学生諸君は自分で泳ぐ能力と知的体力を必死で見つけて欲しいと思います。それを教える環境はまだ大学にあると思っています。要するに「泳げなくては死んじゃうよ」ということです。皆が必死に泳ぐ能力を身につけようとした時に本当の大学の再生が可能となり、意味のある生涯教育が実現できると思います。

5節 おわりに

司会(糸山)：今日のシンポジウムは初めての企画でしたので、どこまでやれるのか心配だったのですが、本当に今日の議題についての端緒に過ぎないということを感じました。ここにご出席のすべてのパネラーの先生方に、「ここで語られたことをどうしたら学外の人々に、我々はどんなことができるのだろうか」ということをお伺いし、この点についてもっと議論すべきでしたがなかなかできませんでした。パネラーの先生方は皆さん口々に地域とのかかわりについておっしゃっていました。石松先生は「我々は納税者なのだから大学を使う権利があるんだ」とおっしゃいましたが、そういうことを皆が知らなければならないと思うのですが、知らないでいるのが現状だと思います。

多くの先生方が地域のことを念頭に置きながら話して下さいました。我々は

ここから大学と地域の関係について考えて行く端緒にしていかななくてはいけないと思うのです。次回以降できればこうした生涯学習教育研究センター主催の公開シンポジウムを開きたいと思っています。その節はみなさんどうか宜しくお願い致します。本日はどうもありがとうございました。